

■独特の合戦アレンジ

昭和59年の初お披露目は、「虫追いがあるげなばい」と集まった大観衆の前で、田中校長とPTA会長を乗せて大馬が運動場を1周しました。

今は、手塚と実盛がそれぞれ大馬に乗って入場します。大人虫追いには無い独特の演出です。大馬は12人程度で担ぎ、その後ろに交代の約20人が付き従います。

保存会・松本典生さんが見守る中、早鐘が鳴ると、両人形が駆け寄ります。大人だと竹が折れるほどに激突しますが、子ども虫追いは、人形を優しく合わせると、すぐに人形を軸にしてクルクル回ります。軽やかな動きはメリーゴランドのようで、なんとも子どもらしい合戦です。

倒れた人形に大馬が突進…ともなりません。大馬は来ないまま、子ども達は人形を立て、その周りに大きな円陣を組みます。「人形裁判」役の保存会・佐藤亨さんが「ただ今の合戦、勝負無し！」と宣言します。子ども達は「祝いましよ」の筑後三本締めと万歳で1度目の合戦を終えます。

2度目の合戦も同様の流れですが、人形裁判が今度は「両者譲らず、勝負は次回に持ち越し！」と来年の運動会に勝負を託し、虫追いは終了、退場となります。

▼田主丸小学校運動会(令和6年)



る、という筋になっていきます。

大人虫追いでは見られなくなった人形裁判が登場し引き分けを宣言する点では、子ども虫追いの方が本来の筋を理解しやすいかもしれません。

■未来の虫追いへ

1カ月しっかり練習した子ども達の演技には、虫追いを愛する地元の人達から惜しめない拍手が送られます。

練習は大変と漏らした先ほどの矢野まやさんは、その作文をこう締めくくります。「演技中も演技が終わってからも、大きな拍手をもらった。やったあ。成功だ。」とてもうれしかった。つらかった練習のことが、いっきに飛んでいった。」

保存会の北川会長は「全国の学校でどこもやっていない虫追いをやって感じた喜びを忘れないでほしい。大人になって振り返った時に虫追いをやったことを誇らしく感じてほしい」と語ります。

その喜びと誇りが将来、田主丸小に戻って後輩に虫追いを伝えるきっかけになり、途切れることのない虫追いの伝統を育て上げるのです。

今年も、多くの子ども達がそんな喜びと誇りとなる体験をしてくれるに違いありません。

■子ども虫追い他でも？

過去には他校にも子ども虫追いがあったのでは、と思わせる資料があります。田主丸町教育委員会と田主丸観光協会の昭和30年代発行の『虫追資料』では、次のように書かれています。

「小学校の運動会のプログラムに「豊年祝」と出ている。虫追である。田主丸町近郷の小学校では例年六年生がやることになっている。一学級の学童が二手に分けられて源平両軍となり人形をかみあわせる。勝負があったところで、紋付姿の裁判提灯の光で勝負を見定める。その所作は大人そっくりである」

「田主丸町近郷」とは、田主丸町近辺の村里になりますから、田主丸小学校とは別の学校も指しているように思われます。

『写真アルバム 久留米・朝倉・小郡うきはの昭和』(樹林舎、2014年)には、昭和33(1958)年の船越中学校運動会の集合写真が掲載されていますが、そこに虫追いの人形・馬・幟がはつきりと写っています。

皆さんのお宅の古い写真帳や日記にも、子ども虫追いが隠れているかもしれません。

第6章 虫追いアート 田主丸河童族とのつながり

河童虫追いの作品が所蔵されています。

田主丸小学校の校長室にも藤田さんの河童虫追絵図が飾られています。田主丸小の子ども虫追いが始まってから2年後の昭和61(1986)年の作です。

■田主丸そよ風ホールの綴帳

田主丸町の複合文化施設「そよ風ホール」の舞台を飾る綴帳(どんちょう)には、虫追の祭りが大きく描かれています。原画の木版画を作成したのは、田主丸町で遊心館(ゆうれいかん)という工房を開いていた版画作家の故・倉富敏之さんです。倉富さんも河童

▼藤田正登「河童虫追い絵図」②9



■巨瀬川の河童壁画

虫追い祭りの合戦場となる巨瀬川の護岸壁には、河童虫追い壁画があります。

この壁画は昭和30(1955)年から河童で田主丸の町おこしをする「九千坊本山田主丸河童族」によるもの。昭和58(1983)年10月から平成4(1992)年末の間のどこかの時点で描き始められたと思われます。壁画の原画になった水墨画が、銘菓かつばのへそ「あけぼのや」に残されています。作者は先代・ご亭主で河童族の設立メンバーだった故・藤田正登さん。あけぼのやには、他にも

▼そよ風ホール綴帳(原画・倉富敏之)



族のメンバーで、巨瀬川の河童壁画を追加制作した平成5(1993)年には河童族の頭領でした。

■北九州・若松の火まつり

「かっぱ祭り」と「たいまつ行列」で構成される祭りは、地元出身の芥川賞作家・火野葦平の発案です。昭和27(1952)年、田主丸の虫追いに葦平は招待され、そこで見た数百もの松明(たいまつ)が続く行列に感動、若松でもやろう、と思い立ったそうです。(『わが一期一会(下)』劉寒吉・創思社出版・昭和60年)

葦平と田主丸との交流は昭和16(1941)年から始まり、同年「鯉とりまあしん」を題材に小説『鯉』を発表、その後も田主丸の人々と親交を深めていきました。そんな中で虫追い招待だったと思われます。

葦平と田主丸の交流が最も盛り上がったのが、昭和30年でした。葦平ら九州文学会の同人達が田主丸に遊びに来た宴席で、田主丸河童族の結成話が持ち上がったのです。その流れで葦平ら九州文学会の面々は河童族の顧問になりました。

なお、田主丸町中心部の虫追い資料に基づけば、葦平が見た虫追いは昭和26(1951)年と思われます。

■今村さんの虫追い竹燈籠

現在の虫追い祭りでも使われる大馬を48年前に設計製作したのが今村重徳さんです。76歳になれましたが、今も元気に造園業に専念されています。活力の源は、趣味の竹燈籠づくり。毎年3月に開催される『水天宮恋もの

▼今村重徳「虫追い竹燈籠」③0



がたり ライトアップコンサート&灯明まつり」の「灯明アート」に作品を提供しています。

虫追いの竹燈籠も作りました。図案を考えるうち、第1回虫追い祭りの興奮がパッとよみがえってきたのだそうです。

虫追い竹燈籠は二時期、息子さんが経営するビザ食堂に置いたそうです。その場所は、偶然にも虫追い祭りが通る豊城交差点のそば。だから、食堂の駐車場で、人形演技を披露してもらえます。

今村重徳さんにとって、虫追いとのつながりは、やはり一生もののようです。ちなみに、今村さんから「あけぼのや」へは「桜に河童」の竹燈籠が贈られています。

このように虫追い祭りは単なる行事に止まらず、様々な芸術活動を通じて、田主丸の暮らしに深く息づいているのです。

※令和7(2025)年、虫追い竹燈籠は田主丸各所で展示予定です。